

土門拳 開館40周年記念回顧展

肉眼を超えた レンズ

2023 10.27 (金)

→ 2024 1.14 (日)

午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
入館料 / 一般800円、高校生400円、中学生以下無料

10月～11月
無休

12月～1月 ◎ 月曜休館
[1月8日(月・祝)は開館、翌9日(火)に休館]
年末年始休館 ◎ 12月29日～1月3日



土門拳《銀座4丁目交差点》1946年



船尾修《満洲国綜合法衙(合同法院)・新京(長春)》2017年

同時開催

第42回
土門拳賞受賞作品展

船尾修 *Osamu Funao*

『満洲国の近代建築遺産』

Ken Doman Museum of Photography

土門拳記念館

山形県酒田市飯森山2丁目13番地(飯森山公園内)
TEL 0234-31-0028
<http://www.domonken-kinenkan.jp/>

開館40周年記念回顧展

土門拳 肉眼を超えたレンズ

本展は、2022年に全国の4つの美術館で開催された巡回展「土門拳—肉眼を超えたレンズ—」を再構成したものです。20世紀の日本を代表するドキュメンタリー『ヒロシマ』『筑豊のこどもたち』から、日本の仏教美術に対する飽くなき追求『古寺巡礼』に至るまで、幅広いジャンルにわたる傑作たちを振り返るとともに、巡回展には含まれていなかったキャリア中期の実験的な作品群なども加えて展覧することで、土門拳という写真家の姿をより総合的に捉えることを目指します。

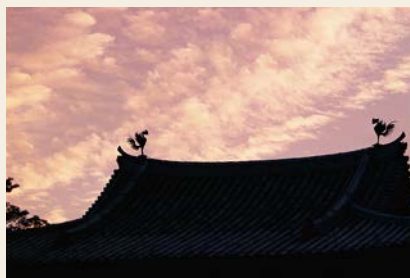
土門の代名詞の1つでもある“リアリズム”は、しばしば「目の前にある現実をそのまま・虚飾なく写し出す」ものとして語られてきました。しかし一方で彼が口にした「写真は肉眼を超える」といった言葉などは、こうした評価とは矛盾する響きをも持っているといえます。土門はレンズを通して何を表現しようとしたのか、そして何が彼の作品を特別なものたらしめたのか。開館40周年という節目の年に、改めてその足跡を辿ります。



土門拳《原爆ドームと元安川》1957年



土門拳《母のない姉妹》1959年（『筑豊のこどもたち』より）



土門拳《平等院鳳凰堂夕焼け》1961年



土門拳
《肉体に関する八章
第一章 美しき薔薇にとげありといへど》
1948年



土門拳
《赤十字看護婦 若い看護婦》1938年

第42回 土門拳賞受賞作品展

船尾修『満洲国の近代建築遺産』



受賞のことは 記憶と記録 往来したい

中国東北部のいくつかの都市を初めて訪れたときに僕は大きな衝撃を受けました。そこはかつて満洲国と呼ばれ、日本がその成立や運営に深く関与した場所です。当時の建築物がそのままの姿で、発展著しい中国のビル群に埋もれるようにしてありました。巨大で威圧的でありながら独特のデザインが発するなんともいえない壮麗さと美しさ、と同時に醜悪さを放つそれらの建築群に僕は一発で魅了されてしまったのです。

満洲のことをご存じの方ならよくわかると思いますが、満洲には新しい時代を切り拓こうとする「陽」の面と、満蒙開拓団の悲劇に代表される「陰」の面とが同居しています。どちらに

重点を置くかによって満洲の実像はまったく異なった表情を見せますが、今も現存するこれら建築群を写真によって記録することにより、いわば歴史の目撃者として俯瞰したフラットな立場から満洲を語るができるのではないかと閃いたのです。

中国の都市開発のスピードは想像を絶するものですから、いつ取り壊しになるかもしれず、僕はその後まるで何かに取り憑かれたかのように歩きまわり、古い建物を探し出しては撮影を行いました。その行為は純粋に楽しいものでした。フィルムに刻まれたことにより、それら建築物は80年、90年ぶりに蘇ったような感覚がありました。写真を撮る醍醐味とはもしかしたらそういうことなのかもしれないなあと改めて気づかされた思いです。記憶と記録の領域を軽々と往来できるような写真を今後とも撮ることができたら最高です。

船尾修 | ふなお・おさむ

【略歴】

1960年神戸市生まれ。筑波大学生物学類卒。写真家。出版社に勤務した時期もあったが、20代、30代にかけては先鋭的なクライミングとバックパッカーの旅にのめりこむ。アフリカ大陸を約4年間放浪旅行中に写真のもつ可能性に目覚めて写真家の道へ。これまでに訪れた国は約80か国。

2011年に東京から大分県の国東半島へ移住。半農半写をモットーに無農薬で米や野菜を作りながら、人間の暮らしと風土の関係性に立脚した写真作品を制作し続けている。現在進行中のプロジェクトに、「カラコルムの氷河」「日本人の心のルーツを求めて」「宮崎の夜神楽」など。家族4人で特築市山香町在住。

【受賞歴】

第9回さがみはら写真新人奨励賞／第25回林忠彦賞／第16回さがみはら写真賞／第1回江成常夫賞／第42回土門拳賞（2023年）

【主な著書】

『アフリカ 豊饒と混沌の大陸（全2巻）』山と深谷社、『UJAMAA』山と深谷社、『世界の秘境の歩き方』羊土社、『循環と共存の森から 狩猟採集民ピグミーの知恵』新評論、『カミサマホトケサマ』冬青社、『世界のともだち④ 南アフリカ共和国』偕成社、『フィリピン残留日本人』冬青社、『カミサマホトケサマ国東半島』（新版）冬青社、『石が囁く 国東半島に秘められた日本人の祈りの古層』K2 Publications、『大イギリス世界への旅』彩流社、『The Great Indus』K2 Publications、『満洲国の近代建築遺産』集広舎、など



船尾修
《満鉄住宅「関東館」／大連》2017年



船尾修
《満洲国軍事部（軍政部、治安部）／
新京（長春）》2016年



船尾修
《大連大広場／大連》2017年

| 会期中のイベント | いずれも予約受付中

土門拳賞受賞作家・船尾修氏によるトークイベント
10/28（土）14:00～

秋のミュージアムコンサート
11/4（土）15:00～ 出演：三船しのぶ（ハンマードルシマー）

学芸員によるほほ月イチギャラリートーク
11/18（土）、12/16（土） いずれも14:00～14:30

一般公募写真展 第18回「わたしのこの一枚」
11/22（水）～12/3（日）
どなたでも参加できます！ 詳細はお問い合わせください

Press Release

●土門拳記念館の新しい展覧会情報をお知らせします●

開館40周年記念回顧展

土門拳

－肉眼を超えたレンズ－



土門拳《銀座4丁目交差点》1946年

本展は、2022年に全国の4つの美術館で開催された巡回展「土門拳－肉眼を超えたレンズ－」を再構成したものです。20世紀の日本を代表するドキュメンタリー『ヒロシマ』『筑豊のこどもたち』から、日本の仏教美術に対する飽くなき追求『古寺巡礼』に至るまで、幅広いジャンルにわたる傑作たちを振り返るとともに、巡回展には含まれていなかったキャリア中期の実験的な作品群なども加えて展覧することで、土門拳という写真家の姿をより総合的に捉えることを目指します。

土門の代名詞の1つでもある“リアリズム”は、しばしば「目の前にある現実をそのまま・虚飾なく写し出す」ものとして語られてきました。しかし一方で彼が口にした「写真は肉眼を超える」といった言葉などは、こうした評価とは矛盾する響きをも持っているといえます。土門はレンズを通して何を表現しようとしたのか、そして何が彼の作品を特別なものたらしめたのか。開館40周年という節目の年に、改めてその足跡を辿ります。



《赤十字看護婦 若い看護婦》
1938年



《肉体に関する八章 第一章 美しき
薔薇にとげありといへど》1948年



《平等院鳳凰堂夕焼け》1961年

上：《母のない姉妹》1959年（『筑豊のこどもたち』より）
下：《原爆ドームと元安川》1957年

2023年10月27日 [金] → 2024年1月14日 [日]

9:00～17:00（入館は16:30まで） / 入館料 一般800円 / 高校生400円 / 中学生以下無料

10～11月：無休 / 12～1月：月曜休館（1月8日（月・祝）は開館し、翌1月9日（火）に休館） / 12月29日～1月3日：年末年始休館

●会期中のイベント（いずれも予約受付中）

▼土門拳賞受賞作家・船尾修氏によるトークイベント 10/28（土）14:00～

▼秋のミュージアムコンサート 11/4（土）15:00～ 出演：三船しのぶ（ハンマーダルシマー）

▼一般公募写真展 第18回「わたしのこの一枚」 11/22（水）～12/3（日）

*どなたでも参加できます！ / 詳細はお問い合わせください。

▼学芸員によるほぼ月イチギャラリートーク 11/18（土）、12/16（土） いずれも14:00～14:30

土門拳記念館
Ken Domon Museum of Photography

〒998-0055 山形県酒田市飯森山2-13 飯森山公園内
<http://www.domonken-kinenkan.jp/>
[Tel] 0234-31-0028
[Mail] kendumon.mop@gmail.com（田中）

画像提供や詳細情報に
関するお問い合わせは、
左記までご連絡ください。

Press Release

●土門拳記念館の新しい展覧会情報をお知らせします●

同時開催

第42回土門拳賞作品展

船尾修

『満洲国の近代建築遺産』



船尾修《満洲国綜合法衙（合同法院）、新京（長春）》2017年

受賞のことば 記憶と記録 往来したい

中国東北部のいくつかの都市を初めて訪れたときに僕は大きな衝撃を受けました。そこはかつて満洲国と呼ばれ、日本がその成立や運営に深く関与した場所です。当時の建築物がそのままの姿で、発展著しい中国のビル群に埋もれるようにしてありました。巨大で威圧的でありながら独特のデザインが発するなんともいえない壮麗さと美しさ、と同時に醜悪さを放つそれらの建築群に僕は一発で魅了されてしまったのです。

満洲のことをご存じの方ならよくわかると思いますが、満洲には新しい時代を切り拓こうとする「陽」の面と、満蒙開拓団の悲劇に代表される「陰」の面とが同居しています。どちらに重点を置くかによって満洲の実像はまったく異なった表情を見せますが、今も現存するこれら建築群を写真によって記録することにより、いわば歴史の目撃者として俯瞰したフラットな立場から満洲を語るができるのではないかと閃いたのです。

中国の都市開発のスピードは想像を絶するものですから、いつ取り壊しになるかもしれず、僕はその後まるで何かに取り憑かれたかのように歩きまわり、古い建物を探し出しては撮影を行いました。その行為は純粋に楽しいものでした。フィルムに刻まれたことにより、それら建築物は80年、90年ぶりに蘇ったような感覚がありました。写真を撮る醍醐味とはもしかしたらそういうことなのかもしれないなあと改めて気づかされた思いです。記憶と記録の領域を軽々と往来できるような写真を今後とも撮ることができたら最高です。



船尾修《満鉄社宅「関東館」/大連》2017年



船尾修《満洲国軍事部（軍政部、治安部）/新京（長春）》2016年



船尾修《大連大広場/大連》2017年

船尾修

1960年神戸市生まれ。筑波大学生物学類卒。写真家。出版社に勤務した時期もあったが、20代、30代にかけては先鋭的なクライミングとバックパッカーの旅にのめりこむ。アフリカ大陸を約4年間放浪旅行中に写真のもつ可能性に目覚めて写真家の道へ。これまでに訪れた国は約80か国。2001年に東京から大分県の国東半島へ移住。半農半写をモットーに無農薬で米や野菜を作りながら、人間の暮らしと風土の関係性に立脚した写真作品を制作し続けている。現在進行中のプロジェクトに、「カラコルムの氷河」「日本人の心のルーツを求めて」「宮崎の夜神楽」など。家族4人で杵築市山香町在住。

受賞歴：第9回さがみはら写真新人奨励賞 / 第25回林忠彦賞 / 第16回さがみはら写真賞
第1回江成常夫賞 / 第42回土門拳賞（2023年）

主な著書：「アフリカ 豊饒と混沌の大陸（全2巻）」山と溪谷社、「UJAMAA」山と溪谷社、「世界の秘境の歩き方」羊土社、「循環と共存の森から 狩猟採集民ビッグミーの知恵」新評論、「カミサマホトケサマ」冬青社、「世界のともだち④ 南アフリカ共和国」偕成社、「フィリピン残留日本人」冬青社、「カミサマホトケサマ国東半島」（新版）冬青社、「石が囁く 国東半島に秘められた日本人の祈りの古層」K2 Publications、「大インダス世界への旅」彩流社、「The Great Indus」K2 Publications、「満洲国の近代建築遺産」集広舎、など



土門拳記念館
Ken Domon Museum of Photography

〒998-0055 山形県酒田市飯森山2-13 飯森山公園内
<http://www.domonken-kinenkan.jp/>
[Tel] 0234-31-0028
[Mail] kendumon.mop@gmail.com（田中）

画像提供や詳細情報に
関するお問い合わせは、
左記までご連絡ください。